

# 見守り支援機器導入のポイント

## 自己紹介

麻生教育サービス(株)勤務。  
長崎県における介護生産性総合相談センター「ながさき介護現場サポートセンター」センター長。

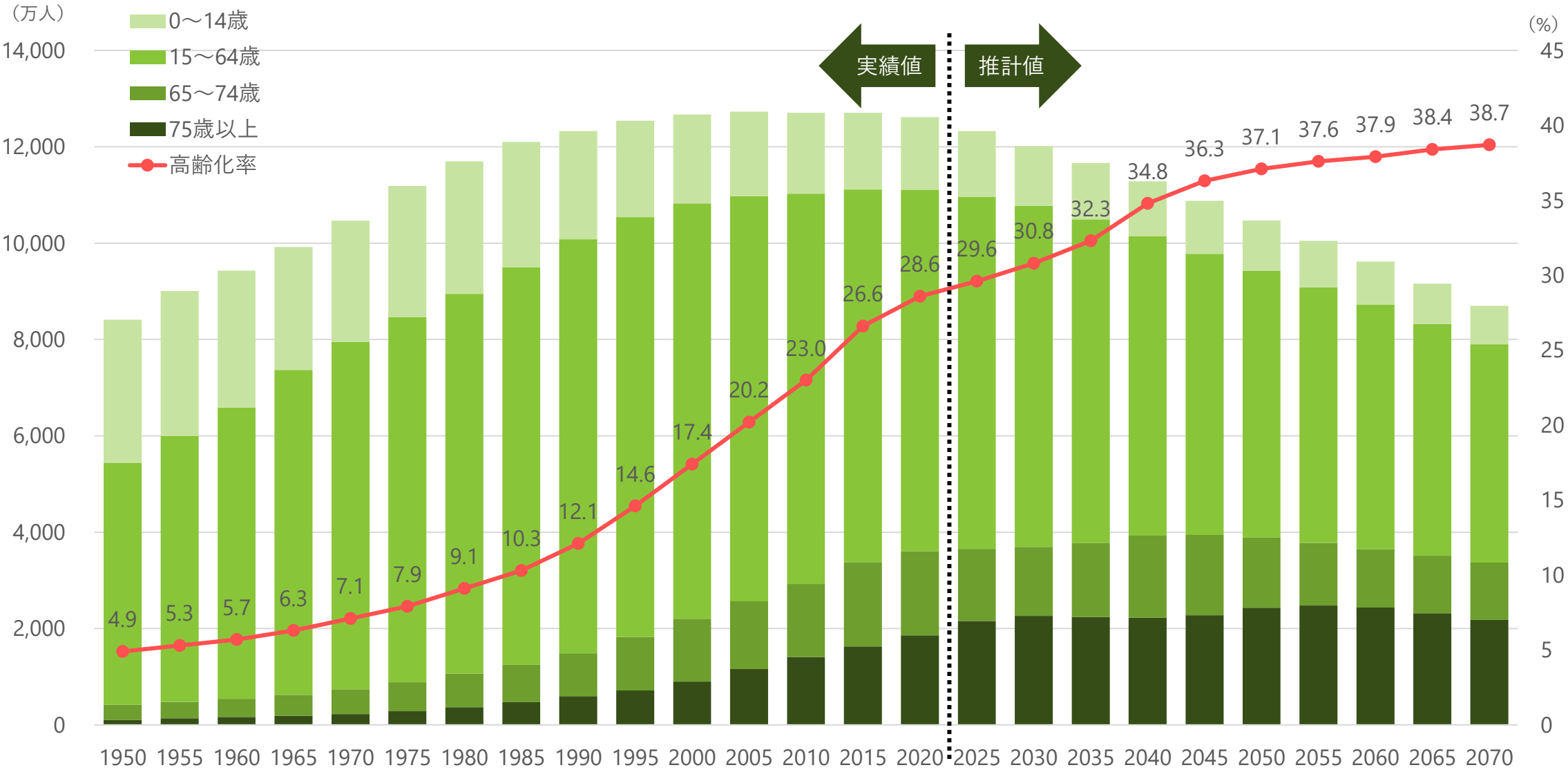
2011年から麻生教育サービスにて、介護・医療・児童・障がい者福祉事業所での人材育成や生産性向上、人材確保等に関連する事業(委託事業、コンサルティング、研修の企画運営)に従事。

2019年北九州市における「介護施設等における生産性向上に資するパイロット事業(実証実験)」から介護現場へのテクノロジー導入支援に関与。

ながさき介護現場サポートセンター着任後は、延べ約420事業所からの業務効率化に関する相談に対応。

## 前回の振り返り

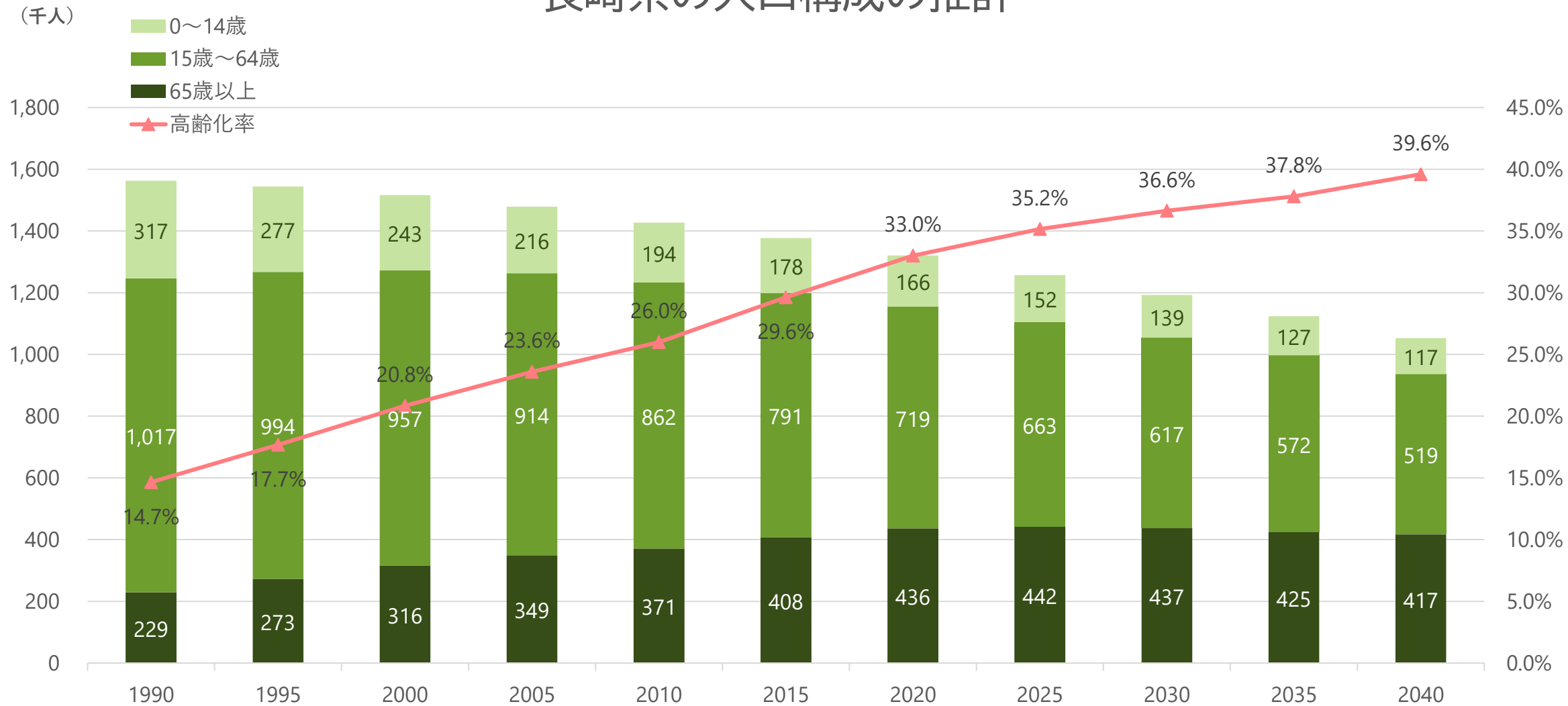
前回の振り返り



◆参考「人口に対する65歳以上の割合」  
7%：高齢化社会      14%：高齢社会

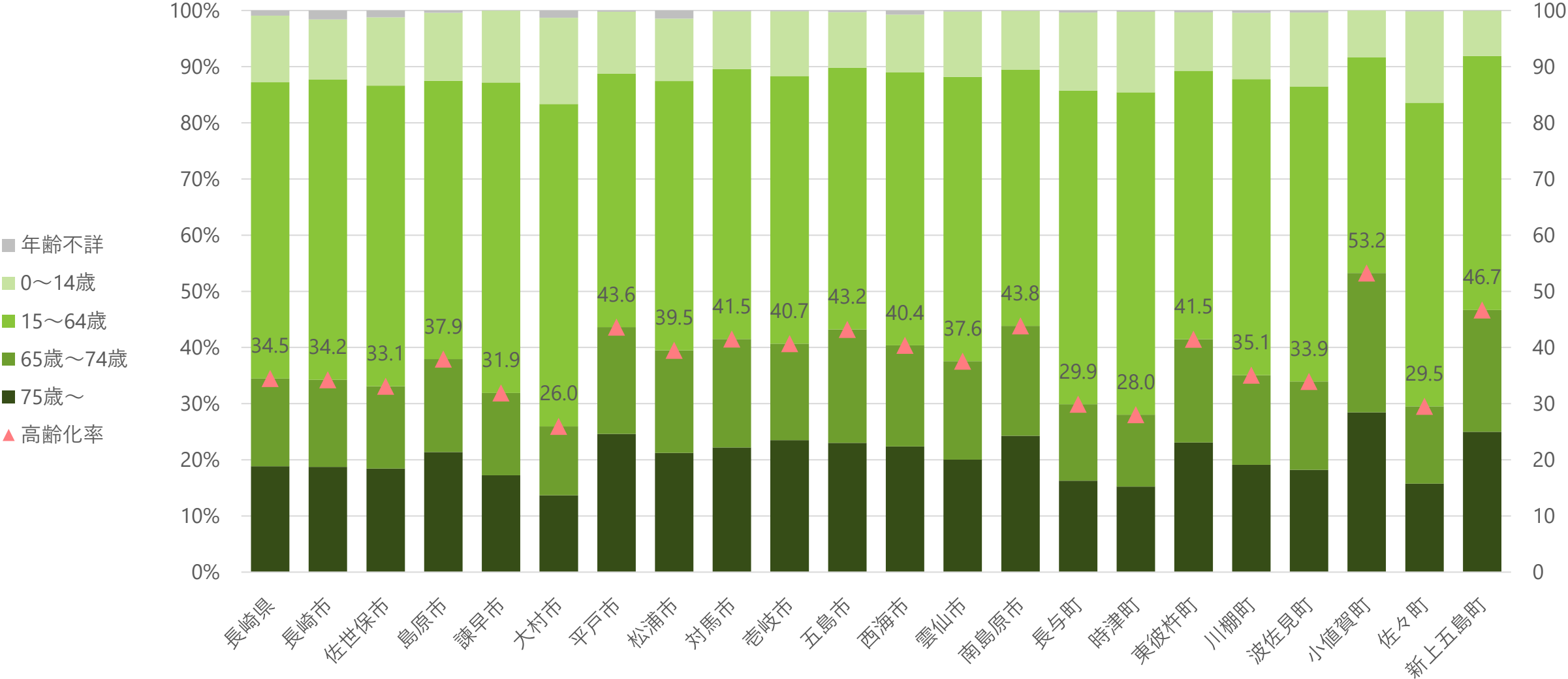
21%以上：超高齢社会  
出典）内閣府「令和6年版高齢社会白書」をもとに作成

# 長崎県の人口構成の推計



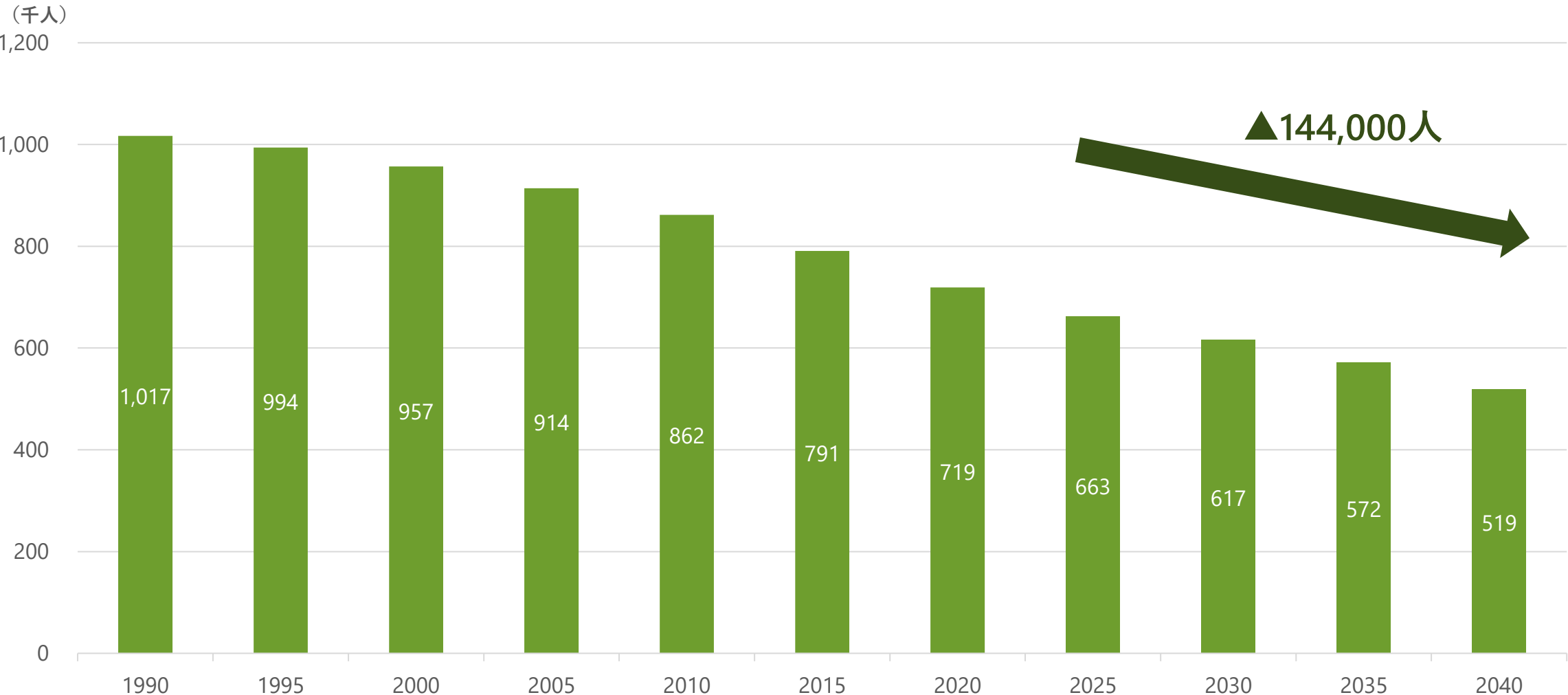
出典)「長崎県2040年研究会報告～全国より先駆けて本県に到来する人口減少社会に対し行うべき取組」, 2019  
注) 2015年までは実績値, 2020年からは推計値

市町別 人口構成・高齢化率（2024年10月1日時点）



出所）長崎県「令和6年異動人口調査」をもとに作成

長崎県の生産年齢人口



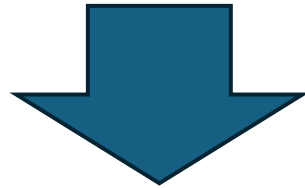
出典)「長崎県2040年研究会報告～全国より先駆けて本県に到来する人口減少社会に対し行うべき取組」, 2019  
注) 2015年までは実績値, 2020年からは推計値

事業所の視座

要介護者の増加(正確には高止まり)

+

労働人口の減少



今の介護業務量では、事業所が存続できない

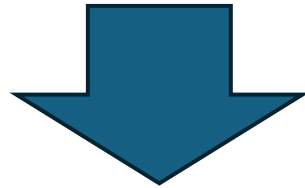


職員の視座

利用者の増加(正確には高止まり)

+

介護職員の減少



今の介護業務量では、この事業所で働き続けることができない

前回の振り返り

## ■生産性の向上とは

✓ムリ・ムダ・ムラを省く

ムリ

負荷が能力を上回っている状態

- ・ 体格差が大きい利用者のケア
- ・ 不良姿勢が長時間継続する業務

ムダ

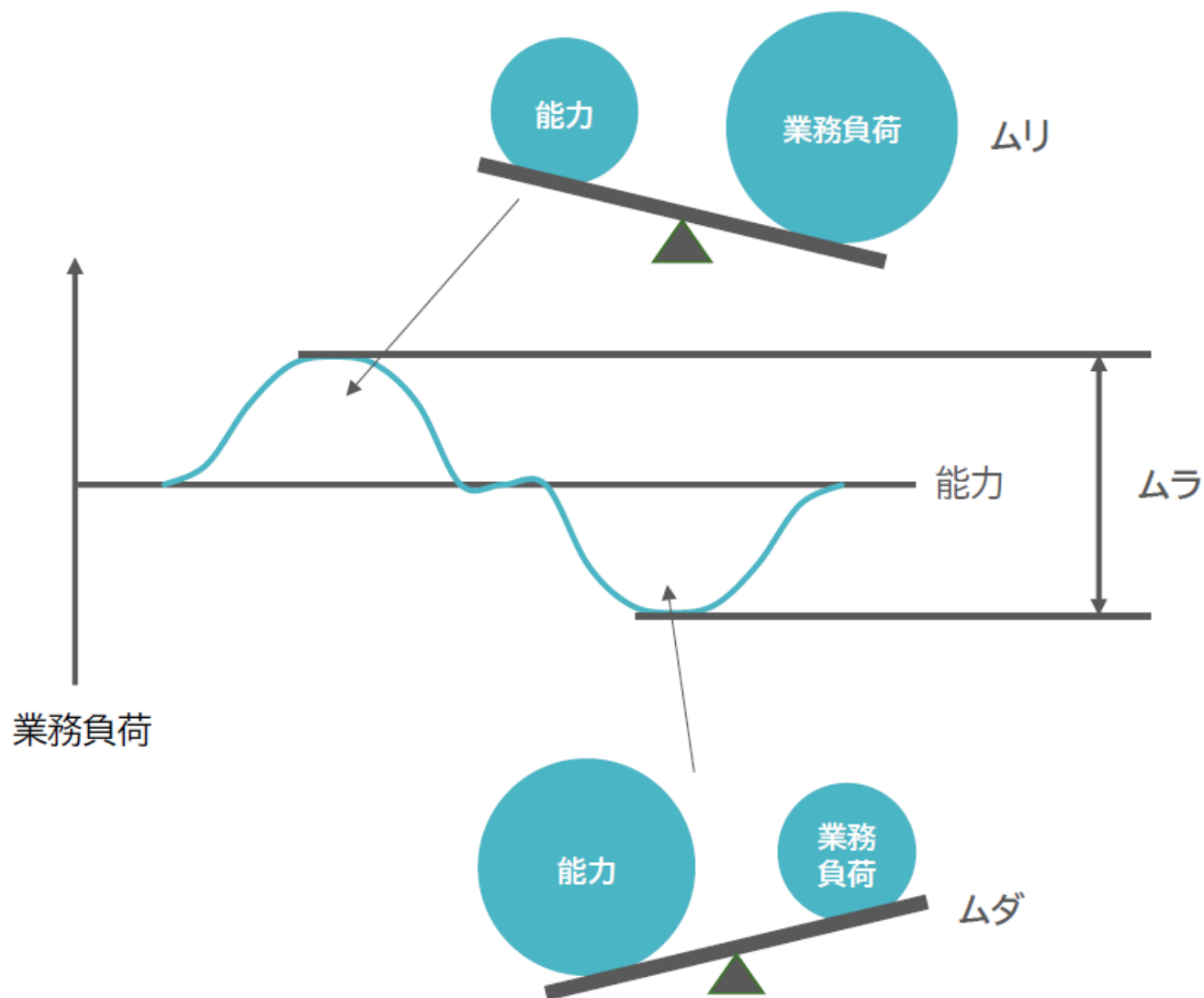
負荷が能力を下回っている状態

- ・ 一人でできる業務を複数人で行う
- ・ 介護記録の転記

ムラ

ムリとムダが混在している状態

- ・ 手順やルールの不徹底
- ・ 職員によってケアの手順が違う



## 前回の振り返り

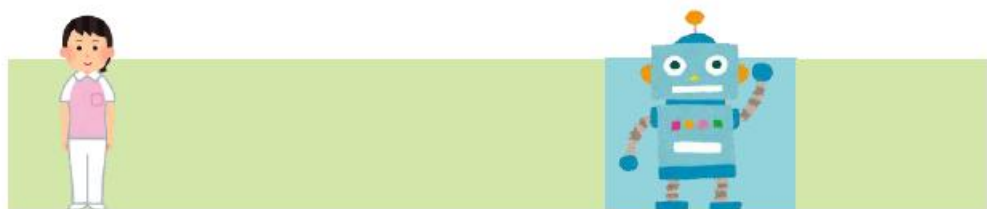
「ムリ・ムダ・ムラ」を軽減する手段のひとつが介護テクノロジー



介護テクノロジーが  
介護職員の替わりになるわけではない



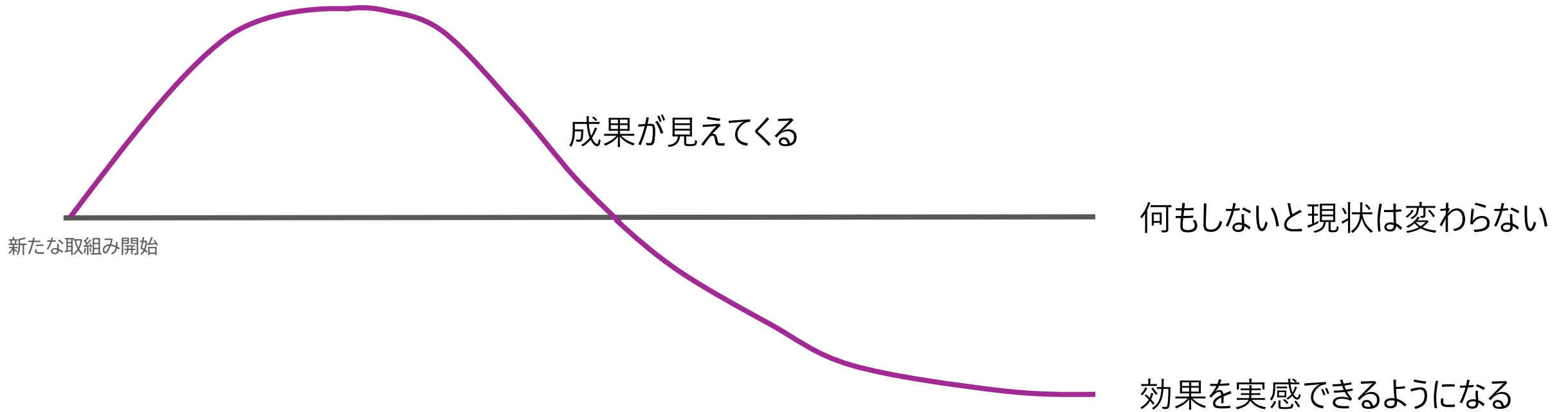
介護テクノロジーが  
ケアの質を高めるわけではない



介護テクノロジーを使いこなし  
生まれたゆとりでケアの質の向上させる

## 前回の振り返り

新しいことに取り組むと負担は増える



👉 どちらの負担をとりますか？

1. 導入目的の明確化と目標設定
2. 解決したい課題とセンサーの種類
3. 将来的なビジョン
4. 導入初期の注意点

# 介護生産性リーダー養成研修 データ活用コース

Q.重要度の高い工程はどこでしょうか？その理由は？

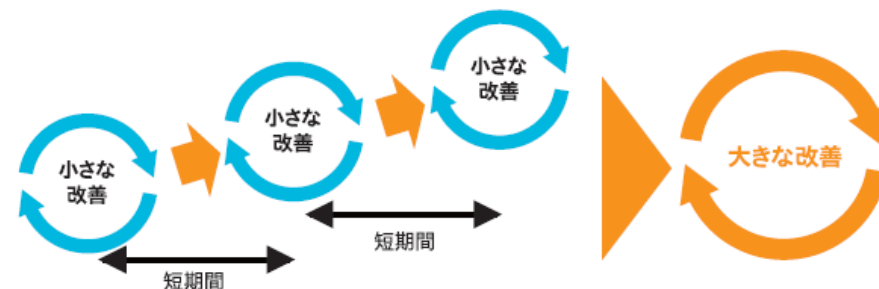
ステップ 1	改善活動の準備をしよう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ 改善活動をするプロジェクトチームを立ち上げ、プロジェクトリーダーを決める</li><li>□ 経営層から施設全体への取組開始のキックオフ宣言をする</li><li>□ 外部の研修会を活用する</li></ul>
ステップ 2	現場の課題を見える化しよう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ 「課題把握シート」「気づきシート」から課題を抽出する</li><li>□ 「因果関係図」「課題分析シート」により課題を構造化する</li><li>□ 「業務時間見える化ツール」により業務を定量的に把握する</li></ul>
ステップ 3	実行計画を立てよう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ 考えられる取組を出し合い課題解決までの道筋を描き、「改善方針シート」で整理する</li><li>□ 「進捗管理シート」において成果を測定する指標を定める</li></ul>
ステップ 4	改善活動に取り組もう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ まずはとにかく取り組み、試行錯誤を繰り返す</li><li>□ 小さな改善事例を作り出す</li></ul>
ステップ 5	改善活動を振り返ろう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ 「効果測定ツール」「進捗管理シート」により予め定めた成果指標や観察のポイントを確認する</li><li>□ 上手くいった点、いかなかった点を整理する</li></ul>
ステップ 6	実行計画を練り直そう	<ul style="list-style-type: none"><li>□ 上手くいった点、いかなかった点について、分析を加える</li><li>□ 他の取組も含め、実行計画に修正を加える</li></ul>

準備が重要

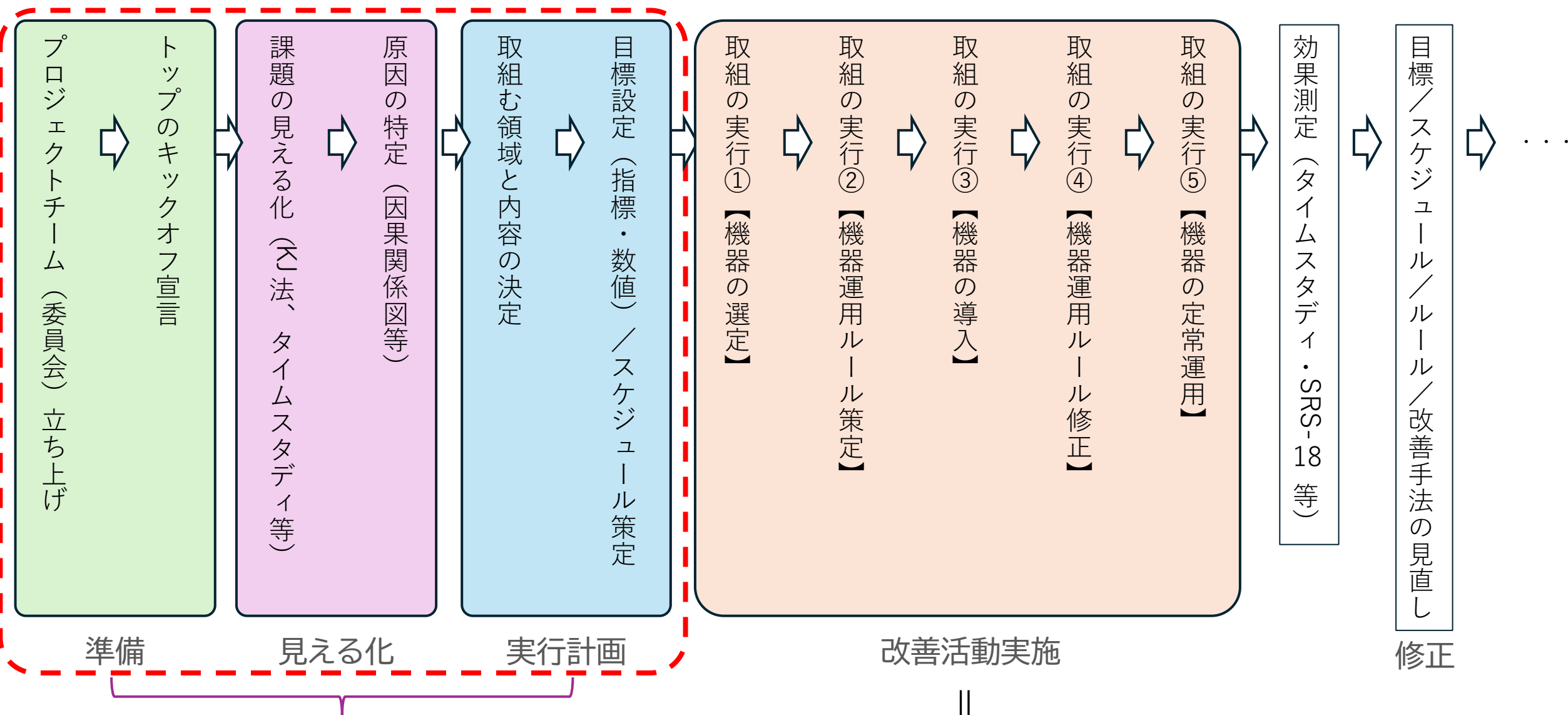
理由①ここがズレるとPDCAの方向性がズレる  
ズレが大きい場合、修正に大きな労力がかかる



PDCAサイクルを回していく



■介護テクノロジーを活用する生産性向上活動フロー



理由②：事業所が独力で推進しなければならない メーカーからの支援を受けることができる

## 導入目的の明確化と目標設定

### Q.導入目的とは、目標設定とは

「目的」： 目指すところ。到達しようとする終着点。

「目標」： 目的を達成するために設定した具体的な到達点。数値や期限を伴う。



## 1. 導入目的の明確化と目標設定

「テクノロジーの導入目的」は何ですか？

# 「テクノロジーの導入」が目的になっていませんか？

「機器自体」に視線が向く



機器・機能だけを比較した検討・選定になる



効果が出にくい



活動が継続しにくい



目的達成の可能性が上がらない



経営陣からの評価が低い



機器が埃をかぶって終わる

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

# テクノロジー導入の目的は「課題(困っていること)解決」 ＝生産性向上

「課題(困っていること)解決」に視線が向く



課題解決のための機器選定になる



効果が出やすい



活動が継続しやすい(職員の協力を得やすい)



目的達成の可能性が上がる



経営陣も高評価しやすい



更なる生産性向上(テクノロジー機器導入)に取り組みやすい

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

### ◆生産性の向上：（困っていることを解決して）介護の価値を高めること

その  
解決  
手段  
として

- ①業務の効率化                   ：   ある業務を完了するまでにかかる時間や人数、  
手間を削減すること
- ②職員の負荷軽減               ：   職員の精神的・肉体的（時間含む）負担を  
現状より減らすこと
- ③サービスの質の向上：   利用者のQOLと自立、安心安全等を維持/向上  
すること

Q.あなたの事業所での「テクノロジー機器の導入の目的」は何ですか？  
また、その解決のための手段は①～③のどれに当てはまりますか？

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

### ◆「導入目的」設定のポイント

- (1) 事業所の状況と「業務の効率化」「職員の負荷軽減」「サービスの質の向上」のいずれかを結びつける。
- (2) 全職員が納得するものでなければならない
- (3) 「導入目的」の説明は、必ず事業所トップが行う

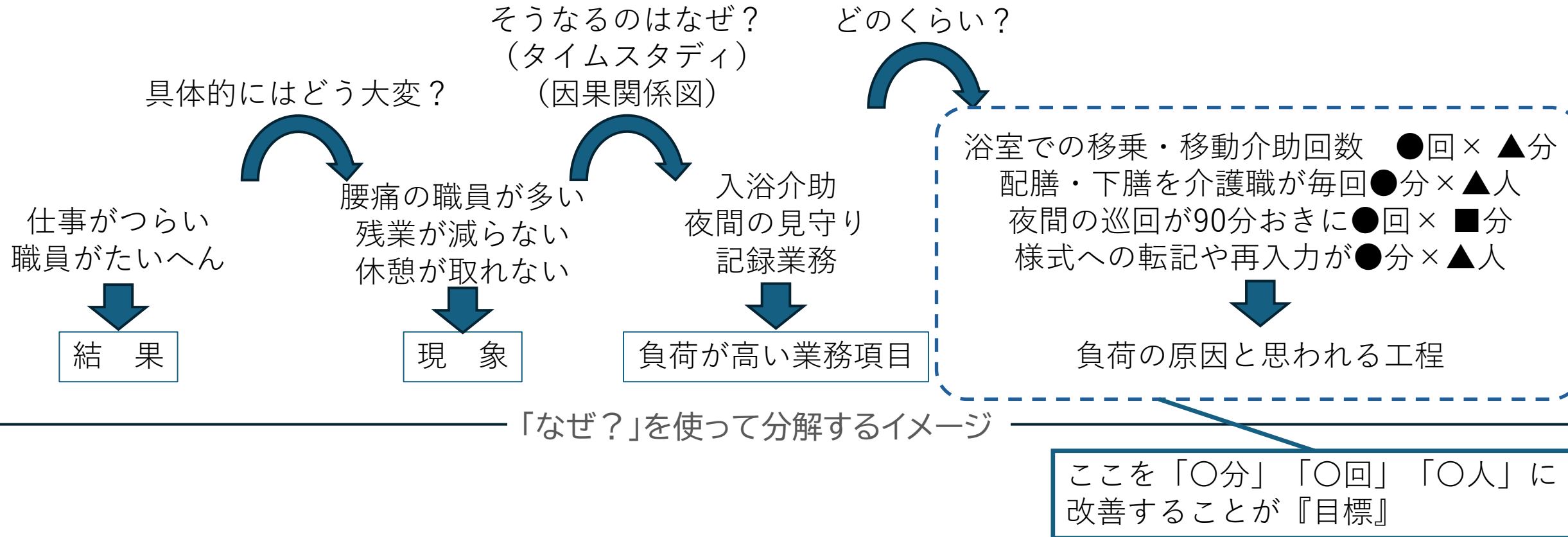
「組織で一体的に取り組む」という空気感の形成が重要



全職員が「生産性向上」を「じぶんごと」として捉えること

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

目標設定の前に 「仕事がつらい」「大変」 ⇒ 分解することが必要



まずは「どの業務項目で」「どのくらい(数値)困っているのか」を明確にする

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

### 目標設定

「目標」： 目的を達成するために設定した具体的な到達点。数値や期限を伴う  
⇒「いつまでに」「どのくらい」生産性を向上できたら成功(計画通り)なのか  
⇒数値化されていることで、達成か未達成かの判断がしやすくなる

Q.「見守り」の「どのくらい」に係する数値には何が考えられますか？

「業務にかかる時間」 「回数」 「移動距離」 「事故等の回数」

「アンケート結果」△ 「残業時間」△

導入前に比較対象となる数値(導入前の数値)を計測しておくこと

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

### ◆数値による目標設定のポイント

- ①「負担」と「負担感」を区別して目標設定を行うこと
- ②目標設定に使用する「指標」が適切かを熟慮すること
- ③「負担となっている業務」「負担感が大きい業務」は、その業務を作業単位に分解し、ボトルネックとなっている工程を特定した上で、解決手段(機器選定)を行うこと



## 1. 導入目的の明確化と目標設定

例:見守り支援機器の導入での簡易的な目標設定方法

目的:夜勤帯の見守り業務の効率化(業務の効率化)

①夜勤時の巡回回数を把握

②1回の巡回にかかる時間数(分)を計測する

③ 1回の巡回にかかる時間数 × 巡回回数 × 巡回をする職員数 = 1晩の巡回にかかる時間  
1晩の巡回にかかる時間 × 30日 = 1か月で夜間巡回にかけている時間

ex.)巡回回数 3回 × 1回の巡回にかかる時間数 20分× 巡回をする職員数 2人 =120分  
1晩の巡回にかかる時間 120分 × 30日 = 1か月で3,600分

④現状実施している巡回回数を何回に削減するかを検討

例:4回の夜間巡回を2回に削減⇒50%削減

※削減率は、国や自治体、メーカーが実証結果を公表している場合があるので参考にする

参考:地域密着型特養(ユニット型、特養29床、ショート10床)

⇒夜勤帯の見守り業務量62%削減

※職員の熟練度、利用者の介護度(認知症の度合)と人数、フロア構造等によって変化

## 1. 導入目的の明確化と目標設定

例: 見守り支援機器の導入での「見える化」の方法

目的: 夜勤帯の見守り業務の効率化（業務の効率化）

①夜勤での業務を書き出す

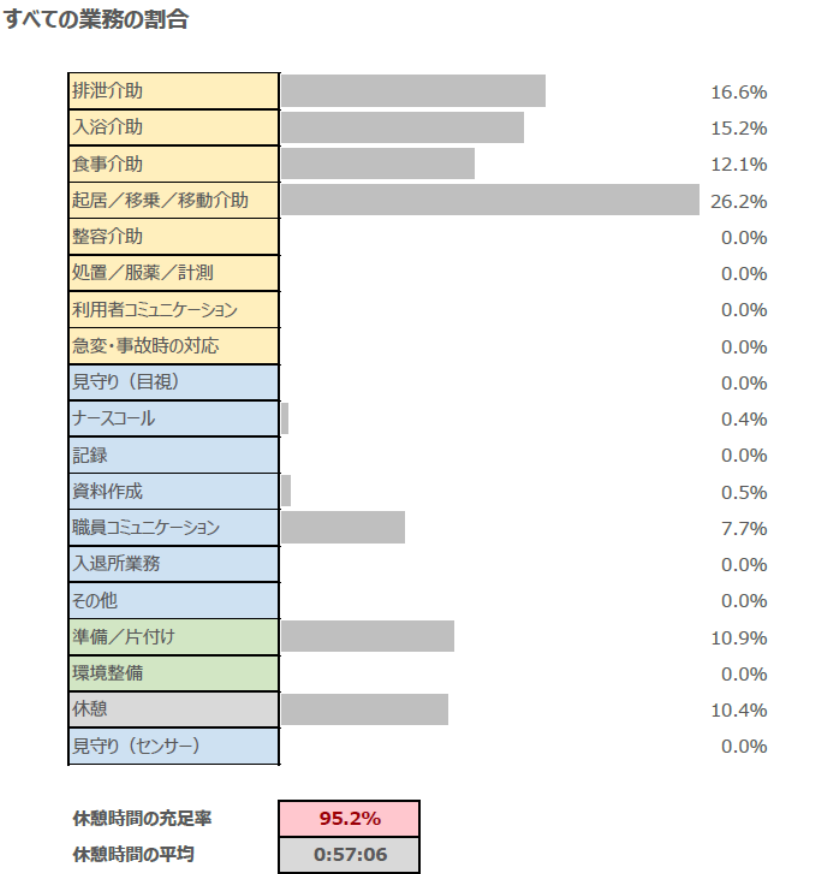
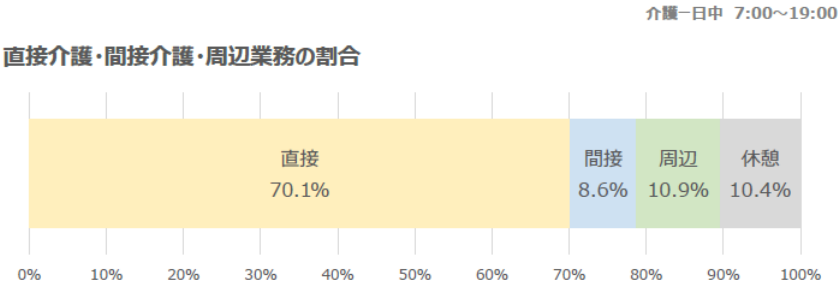
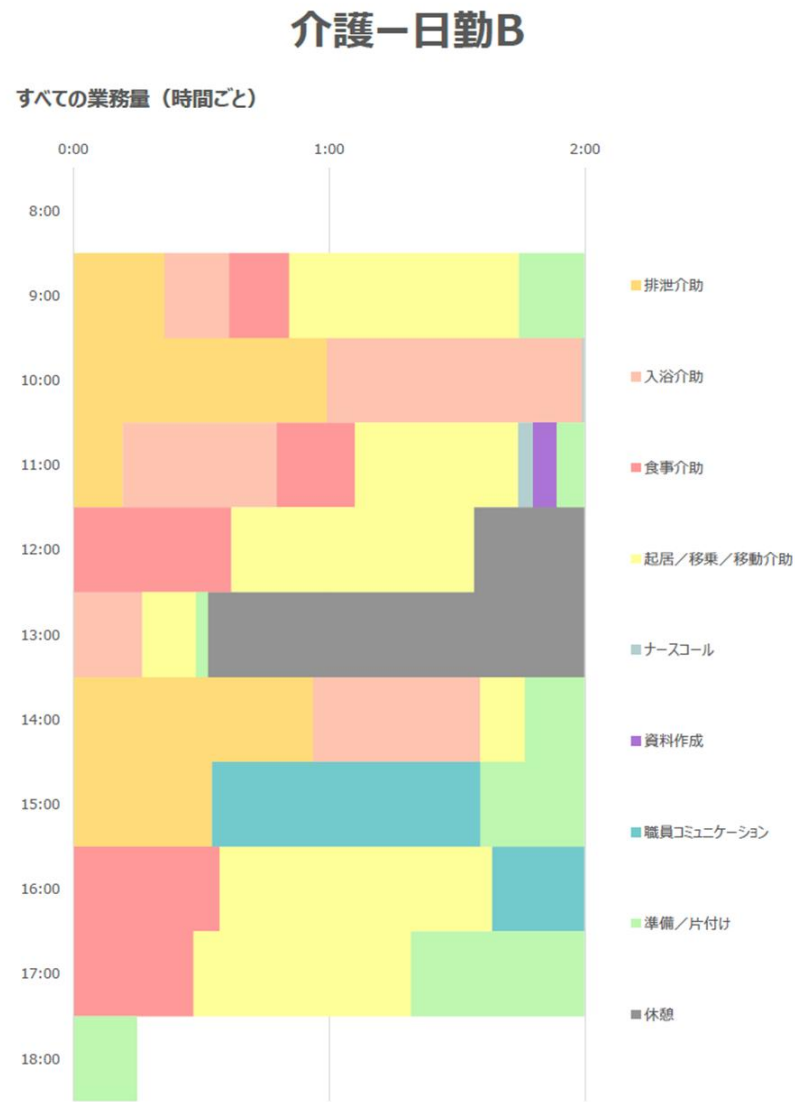
②それぞれの業務にどのくらいの時間がかかっているかを計測する(タイムスタディ)  
複数日間、可能であれば1週間程度(日～土)繰り返す

③計測した時間を業務ごとに合計し、日数で割る  
⇒平均的な夜勤帯業務の実施時間が把握できる

④可能であれば、グラフ化する

1. 導入目的の明確化と目標設定

グラフ化の例



解決したい課題とセンサーの種類

## 2. 解決したい課題とセンサーの種類

### ◆見守り支援機器とは

センサーによって利用者の移動や状態の変化をセンシング(検知)し、居室外から状況変化を把握するための機器。

機器によってはシステムと連動し、センシングしたデータをそのまま記録することができる。

### ◆主なセンサーの種類(検知する対象)

(1)体動検知 ⇒呼吸・脈拍・睡眠状態の把握が可能

(2)荷重検知 ⇒検知から発報までのタイムラグが短い

(3)画像検知 ⇒利用者の状況を視覚的に確認可能

オプションや複数機器の  
組み合わせによって  
補完が可能

※上記は大まかな分類です。また、センサーは技術革新によって進化します。

## 2. 解決したい課題とセンサーの種類

### ◆見守りセンサーの選び方

#### (1) 目的は何か

- ①業務の効率化 ……居室内の状況確認、夜勤業務の効率化
- ②職員の負担軽減……経験が浅い職員の心理的負担軽減
- ③介護の質の向上……転倒・転落事故の防止、検証
  - ……訪室回数を減らすことによる利用者の良質な睡眠の確保
  - ……見守りの質の向上(職員個人の経験に囚われない見守り)
  - ……科学的介護の実践のための睡眠状態データの取得

どのようなセンサーが適しているかを検討

## 2. 解決したい課題とセンサーの種類

### ◆見守りセンサーの選び方

(2)「必要な機能は何か」、「あればより良い機能は何か」

- ①呼吸、脈拍、睡眠等を検知できる
- ②検知と発報にタイムラグが少ない
- ③画像等で居室内の状況が把握できる
- ④モバイル端末との連動
- ⑤記録の自動化
- ⑥録画再生機能
- ⑦多床室での運用
- ⑧将来的な拡張性            等

まず整理した上で、機器選定に取り掛かる

将来的なビジョン



### 3. 将来的なビジョン

#### ◆ビジョンとは、「組織が将来こうありたいと描く理想の姿」

組織が中長期的に目指す方向性や理想像を明確に示したもの。  
経営判断や職員の行動の“基準”となる指針。

法人理念＝「哲学、存在意義」「なぜ事業として介護を行うのか」(根っこ)

ビジョン＝「理想の未来像」「どういう姿を目指すのか」(未来像)

#### ◆テクノロジー導入によって、どんな事業所にしたいのか

- ・地域、ご利用者、そのご家族にどうあっていただきたいのか
- ・そのためには、提供するサービスの質、職員の在り方、職場環境はどうあるべきか
- ・そのためには、科学的介護にどう取り組むのか

※科学的介護:科学的根拠(エビデンス)やデータに基づき、ご利用者にとって  
最も適切な介護サービスを計画・提供すること(≠テクノロジー機器導入)

「どんな事業所にしたいか」という観点でテクノロジー導入を考える視点を持つ

### 3. 将来的なビジョン

#### 具体的検討項目の例

##### ① 事業所内で、どの業務までテクノロジーを導入(もしくは連携)するか

- ・導入済テクノロジーとの連携の検討  
⇒主に記録システム、請求関連システム
- ・導入済テクノロジーの入れ替えを見据えた検討  
⇒特にナースコール
- ・将来的な拡張性の検討

##### ② 法人内で、どのレベルまで統一するか

- ・機器とオペレーション統一による効率化  
⇒法人単位でのデータとノウハウ蓄積による生産性向上の取組み
- ・法人内異動直後の生産性向上

(・協働化による生産性向上の検討)

協働化:複数の事業者や職種、地域の関係者が互いに役割を分担・連携しながら、高齢者や利用者に最適な介護サービスを提供する仕組み

##### ③ 外部事業所との連携やデータ共有

- ・医療や居宅介護支援事業所との連携

### 3. 将来的なビジョン

削減できた時間を何に使うか

- ◆「日勤帯業務を夜勤帯にシフトする」ことで日勤帯業務を改善することも可能  
⇒「いつ実施してもよい業務」かつ「どこで実施してもよい業務」であること

何に使ってもでもよいが、目的につながらなければならない

## 導入初期の注意点

## 4. 導入初期の注意点

よく聞く事例: 90床の見守り支援機器を同時に導入したが、頻回に同時にアラームが発報し、現場が混乱した

- (1)「アラームの発報回数(対応必要回数)が増える」ことを事前に理解／共有しておく
- (2)同時にアラームが鳴った場合の対応の優先順位を明確にルール化しておく
- (3)利用者が変われば、設定を変える必要がある  
※特に「利用者の頻繁な出入り」がある場合(ショートでの使用等)
- (4)手元でアラーム内容が確認できる端末や居室内カメラは必要ないか
- (5)見守り用カメラも含め、必ずしも全居室に一斉に導入する必要があるか

ご清聴、ありがとうございました。